

# 小林秀雄「感想」についての試論(2)

——物理学と社会理論——

An Essay on Hideo Kobayashi's Interpretation of Henri Bergson, Part II:  
Physics and Social Theory

菊 谷 和 宏  
Kikutani, Kazuhiro

## ABSTRACT

Following Part I, this paper, part II, further deepens the analysis of Hideo Kobayashi's interpretation on Henri Bergson's theory of matter based on the "durée". After clarifying its theoretical limitation in comparison with Everett's interpretation of quantum mechanics, we newly shed light on an inseparable relationship between physics and social theory. In conclusion, we elucidate the possibility of establishing a new phase of social theory by founding the 'sociability' by means of physics, beyond the horizon that Kobayashi reached with Bergson.

(『経済理論』333号掲載の(1)末尾から続く)

さて、以上見てきたとおり、解釈としては、ベルクソンの持続を元にした物質理論による量子的事実の解釈は成り立つ。それはコペンハーゲン解釈と矛盾せず、さらに、コペンハーゲン解釈が量子的事実に限った解釈であるのに対し、ベルクソンの理論は、物質一般について、さらには精神について包括的な説明を与えるものであり、「波動関数の収縮」さえ論理的に説明しうるものであり、科学というものが現実のできる限り広範な——理念的には「すべて」の——説明を良しとするのであれば、一層強力な科学理論であるとさえ言えよう。

ただし、この解釈が唯一の方向性とは、すなわち实在把握の正しい道とはまだ

言えないのだ。というのも、量子力学が描き出す実在の姿の、コペンハーゲン解釈とはまったく異なる解釈が存在するからである。

物理学の専門雑誌に掲載された名もない大学院生の一論文に気付かなかったことで小林秀雄を責めることは無論できないが、彼が「感想」の連載を始めた1958年には原理的には参照可能であった、より新しい解釈が1957年に発表されている。いわゆるエヴェレット解釈である (Everett III 1957)。

エヴェレット自身の慎重な物言いにもかかわらず、この解釈がSF以上のものであるのか否かは専門家の間でも議論が分かれている。しかし本稿にとって重要な点は、この解釈がコペンハーゲン解釈同様、二重スリット実験における干渉縞の問題も含め、実験的事実を無矛盾に説明できることであり、さらに重要なことは、この解釈においては波動関数の収縮が起きない、正確には波動関数の収縮という概念を用いる必要がないことである。

発案者によって「相対状態定式化 (relative state formulation)」と名付けられ、今日ではむしろ「多世界解釈」との別名をもって呼ばれるエヴェレットの解釈によれば、量子状態にある素粒子の波動関数は、観測されることによって収縮しその値が定まるわけではない。素粒子は観測の有無とは無関係に、量子状態のまま常に同じように存在しているのだ。ただ人間の意識はそのうちの一つの状態しか認識できないが故に、あたかも観測によって物理量が定められたかのように見えるだけである。実際には、他の物理量が観測された他の世界が存在する。ただ、素粒子の振る舞いを記述するシュレーディンガー方程式は線形であるために、観測されたある状態 (世界) は、その後他の状態 (世界) と相互作用することはなく、そのまま時間発展を続けることになる。ということは、ある状態を観測しある物理的な値を得た観察者、つまりある一つの世界に属する観察者にとっては、物質の振る舞いはまったく決定論的である。無論、他の多くの観察者——他の多くの本人——が他の多くの世界に存在するわけだが、その各自の眼前には、意識から独立した、完全に客観的で完全に決定論的な物質世界が現れるのだ (Everett III 1957, DeWitt & Graham 1973)。

この解釈を、古典物理学的決定論からの反撃と見るべきかどうか、またそもそも数式とその解釈以上のリアリティが含まれているか否かについて、判断するだけの根拠を筆者は今のところ持っていない。しかし、少なくとも、波動関数を収縮させなくとも、したがって観測者と観測対象の根源的な連続性を前提とせずとも、世界は厳密に無矛盾に記述し解釈することが可能であることが今日では示されていることは否定できない。つまり、持続を用いて、外的内的実在を一元的に理解し、主観－客観問題を止揚する「必然性」は現代では認められないと言わざるをえないように思われる。

以上、本節で論じた意味において、小林秀雄によるベルクソンの物質理論（というよりも、もはや実在理論とでも呼んだ方が適切かもしれないが）の解釈は、量子力学との親和性を示唆することでこの理論の射程を延長し、その意味では量子力学を予言したと言いうる。そして確かに、コペンハーゲン解釈における波動関数の収縮に対し、持続を用いてより包括的な説明を与え、観測問題に対して、したがって主観－客観問題に対して、物理学に対しても哲学に対しても重要な科学的貢献をしたと言えよう。

しかるに、他の、本質的な点でそれとは異なる理論的可能性が現実を示されている以上、ベルクソンの物質理論の射程の延長も、今のところは可能性の段階にとどまっているというのが妥当な評価ではないだろうか。

ただし、まったく同じ評価がコペンハーゲン解釈にもエヴェレット解釈にも与えられる。それらはいずれも、現在のところ現象の「可能な解釈」にすぎない。したがって、ベルクソンの物質理論も、その方法論、その指し示すところに従って、物理－心理学上の実証的研究を立案し進展させる、なんらかの肯定的な結果が得られることは十分に考えられる。そして、この可能性を開いたことは、小林秀雄によるベルクソン物質理論の解釈の貴重な意義と言えるのではなからうか。それ以上のことは、実験結果を待ってからである。

### 第三節 科学と社会性——「感想」を超えて

さて、かようにして現代物理学とベルクソン哲学との関係は、留保付きの、いささか不満の残るものに留まらざるをえなかったのであるが、しかし、その読解のいわば癖のために小林がうまく扱うことのできなかった別の関係、ないしはさらに進んだ関係が両者には存在するように思われる。本節では、まとめて代えて、この点を探りたい。それは同時に、ベルクソン研究の観点から小林秀雄によるベルクソン解釈の問題点を指摘し、今後のさらなる研究の発展につなげる試みともなろう。

私の見るところ、小林によるベルクソン解釈の最大の問題は後期ベルクソンとの整合性にある。

小林秀雄は、持続を真の實在と見るベルクソンの物質理論によって、量子力学が認めた現象とその解釈との一致を捉えた。しかるに、その過程で、彼はあまりにも「持続」に執着しすぎたように私には思われる。

連載の中断に伴って最終回となった第56回において、小林は、ベルクソンの理論が一元論なのか二元論なのかとの問題に奇妙にこだわる。

ベルグソンの世界像の描き方は、明らかに二元論的なのだが、それは、物質を空間的なものに、精神を空間外のものに考へる普通の二元論を飽くまでも避けようとする二元論なのである。……ベルグソンの出発点は、私達は世界の中に生きてゐるといふ事実にある。この全く単純な事実が、先づ直観に与へられてゐるところから見れば、彼の思想は一元論的なものとも言へるのだが、この直観された精神生理学的なエネルギーの力学を説明しようとするれば、必然的にはつきりした二元論となる（小林 1958-1963：第56回：369-370：強調筆者）。

ベルグソンの思想が二元論であるとか、その方法が二元論的であるとかい

ふ事は、かなり面倒な問題である。「物質と記憶」の序文の冒頭を引用してみよう。「この本は……はつきりした二元論である。……」

この短い文章でも、注意して読めば、この「二元論である」といふ〔ベルグソンの〕言葉には、複雑なニュアンスがある事がわかるだらう。……恐らくベルグソンの真意は次のやうになると言つていい。自分にとつては二元論とは言葉ではない。二元論で、実際に事が巧く運ぶのを見れば、二元論の惹起する理論的困難は、二元論といふ言葉に由来するに過ぎぬ事を、諸君は合点するであらう、と。……彼の言ふ二元論といふ言葉に含まれた一種苦いニュアンスを感じる事が出来るであらう (*ibid.* : 第 56 回 : 370 : 強調筆者)。

上記引用に見られるとおり、ベルクソン自身の「はつきりした二元論である」との言にもかかわらず、それが一元論であることをなんとか立証しようと努力している。その一元論とは、前節に見たことからもはや明らかなおと、精神も物質も持続という真の实在のリズムの違いにすぎないという、いわば「持続一元論」である。

「感想」はまさにこの地点で、この主張の最中で中断している。そのためこの努力が実ったと言えるか否かは判断のしようがない。しかし、私にはむしろ、この無理な努力に入り込んだが故に「感想」は中断せざるをえなかったように思われるのだ。

本稿第一節でも触れておいたとおり、「感想」における主要な検討対象は『試論』(1889)と『物質と記憶』(1896)である。『創造的進化』(1907)については浅く少々、晩年の著作『二源泉』(1932)に至っては結局のところ正面から扱われたのは最初の2回だけと言ってよい。このような対象の限定ないし集中は「彼〔ベルクソン〕の物質の性質に関する直観の予言的な意味」を明るみに出すためであり、「生の哲学者としての曖昧な名声」に目を奪われないために必要であったのかもしれない。その成果として持続一元論が得られ、ベルクソン物質

理論の量子力学にまで達する射程が提示できたのだろう。しかし、それがために、小林は、ベルクソンの思想の重要な発展、段階的な跳躍を見落とした。この一種非連続的な跳躍のため単純に初期の思想の展開とは捉えられない晩年の思想を、うまく解釈できなかったのだ。

証拠を示そう。

『創造的進化』では、生命の原理、生命性そのものである生命のはずみ (élan vital) が物質世界に衝突し、その衝撃の勢い (élan) の物質中での進行が生命の進化であると考えられている。

生命は、その発現以来、同じ一つのはずみが、末広がり発散する進化の諸線に分かれながら続いてきたものである (Bergson 1907 : 53=79)。

そしてその生命とは、意識である。

[生命の進化は] 一切の経過から見たところは、あたかも意識の大きな一つの流れが、意識の常として桁外れに多様な潜在力を相互透入の状態に担いながら、物質に浸入してきたかのようである。物質はこの流れに引きずられて有機組織になったが、流れの運動は物質によって無限に遅らせられると同時に無限に分岐させられた (*ibid.* : 182=218)。

生命、すなわち物質の直中を走らせられている意識 (*ibid.* : 183=219)。

たしかに、精神と物質は持続において不可分である。しかしこの不可分性は、厳密に言えば、生命という運動すなわち意識が、物質に浸入しその抵抗に出会ったその局面における不可分性を指している。

同じ [一つの] 運動の同じ [一つの] 反転から、精神の知性性 (*l'intellectualité*

*de l'esprit*) と物の物質性 (*la matérialité des choses*) とが同時に作り出されるのである (*ibid.* : 207=247 : 強調原文)。

つまり、小林は明確に区別していないが、精神と知性とは、また物質とその物質性とは異なる。知性性と物質性とは、精神と物質との接触面において本源的に区別不能という意味で一元的なものとして現れる。しかし、だからといって両者の源が、精神と物質との元が同じ一つのところにあるとまではまだ言いえないのだ。

確かに『創造的進化』における次のような箇所を強調して読めば、小林のような解釈、持続一元論も成り立とうし、実際小林はそう読んだのだろう。

物質 (*matière*) が裁断されて無機の諸物体 (*corps inorganisés*) に分かれるのは私達の感覚 (*sens*) や知性 (*intelligence*) と関係したことであり、物質はある不可分な全体として見るならば物 (*chose*) よりもむしろ流れ (*flux*) にちがいない (*ibid.* : 187=224)。

極限のところでは我々は、絶えず新たに始まる現在から成る存在を垣間見る。……それが物質の存在なのだろうか。完全にそうであるわけではおそらくない。物質を分析すると要素振動 (*ébranlements élémentaires*) に分解されるが、それらの振動は最も短いものであっても、ごく弱く今にも消えそうだが一つの持続を持ち、無持続ではないのだから。しかしとにかく、物理的存在 (*existence physique*) は第二の「弛緩の」方向に、同様に心的存在 (*existence psychique*) は第一の「緊張の」方向に傾くことは想定できよう (*ibid.* : 202=241)。

しかし、だからといって、『創造的進化』の主題である、生命の進化、生命のはずみを無視してよいはずはない。実際、『創造的進化』以後のベルクソン哲学の

発展は、以下に見るとおり、むしろこの方向にあるのだから。

『創造的進化』執筆後、彼を師と仰ぐ友人ジャック・シュヴァリエに対し、ベルクソンは次のように話している。

私の方法は、経験に支えられて、できるだけ遠くまで精神的現実 (réalités spirituelles) の道を歩むことだが、経験を越えてはならない。この経験は、神秘的経験 (expérience mystique) となつてはじめて、神にまで達することだろう。そして確かに、私はこのような神秘的経験を排除しはしない。このような経験は私の方法の延長線上にあるとさえ言うこともできよう。しかし私の方法は、今一度言うが、[まだ] そこまでは行っていない (Chevalier 1959 : 70=81-82)。

私の方法は、経験から出発し、できるだけ高く根源にまでさかのぼるが、経験がとどまるところでとどまるという点に存する。こうして、《生命のはずみ》までさかのぼる。このはずみは、どこから来るに違いない。しかし、どこからだろう。その点私は何も言っていない。というのは、『創造的進化』の著者としての私の持っている資料では何もわからないからだ。私はこの原理を確かに名指しした。そして、この原理を名指すからには、神としか呼ぶことができない。しかし、『創造的進化』に忠実である限り、この神は、一つの有限な、不完全な世界の原理  $x$  (la cause  $x$  d'un monde fini et imparfait) としてのみ知られている。特に、ここには神を摂理 (Providence) として啓示するものは何もない。……これより先に行くには、私が解するような純粋な哲学の方法をもつてする場合には (もちろん啓示と信仰に訴えることを言っているのではない) ……まったく性質を異にする研究が必要だろう。つまり、道徳の問題を深く探究する必要があるだろう。言うことは、ただ、『創造的進化』の中で提示された見解には、人が祈るときに呼びかける神のような、《完全な》神とあえて私が呼ぶ神の肯定と相容れ



ないものは何もない、ということだ (*ibid.* : 65=75-76 : 強調筆者。ただし「純粋な哲学の方法をもって」のみ強調原文)。

揺らぐことなく経験を足場とする彼らしいこの慎重で着実な熟慮を続け、ベルクソンはこの後「道德の問題」を深く探究し、1932年『道德と宗教の二源泉』を出版する。そして、『創造的進化』から『二源泉』に至る、実に25年間の研究を振り返り、次のように告白する。

あの著作『創造的進化』は、生命は大いなる神秘であるということを私に理解させることで、それ以前の何にもまして、私をはっきりと道に乗せることになった。それまでは、数学と物理学に非常な興味を抱いていた。物質 (matière) もまた一大神秘だと言いかねなかったことだろう。それ以後は違う。生命に注意を集中して以降、私は生命が大いなる神秘であることを理解したのだ (*ibid.* : 274=306 : 強調筆者。ただし「生命は大いなる神秘である」のみ強調原文)。

もし、『二源泉』の中に『創造的進化』以上の何物もなく、最新の著書の中で言っていることがその前の著書から単に演繹されているにすぎないなら、それを発見するべく25年を費やしたことはどう説明するのだろうか。1907年に書きさえすればよかったことになる。実際には、その後の神の発見が、以前の私の発見を否定することにはならず、これを補完し、上位の次元に移すことになった (*ibid.* : 176=198 : 強調筆者。ただし「上位の次元に移すことに」のみ強調原文)。

そして、『二源泉』の中で「ここで生の原理そのもの (principe même de la vie) にまで突進しなければならぬことは確かである」(Bergson 1932 : 103=123 : 強調筆者) と主張し、主にカトリック神秘家——聖パウロ、シエナの聖カ

テリナ、聖テレザ、聖フランチェスコ、そしてジャンヌ・ダルクら——の、他者による外的観察は不可能だが明確であり相互に一致した内的神秘体験——神性の直接的経験——の報告・証言を与件として、そこに突進したのだ。すなわち、よく知られた「開いた社会」への道である。

この先の内容をここで論じる紙幅は<sup>(14)</sup>なく、またそれが本稿の趣旨でもない。ただここで我々が確認すべきことは、『創造的進化』と『二源泉』の間には、質的な断絶、一つの飛躍 (élan) があること、つまり、数学や物理学に関心を持ち物質に重点を置いていたいわば「飛躍以前」と、それらとは質的に異なる生命の神秘性を認め扱うようになった「飛躍以後」があること、そして当然のことながらこのような飛躍は、初期の著作に依拠した持続一元論の単なる延長として、その意味で連続的に捉え切ることができるものではないこと、著者本人がそれを明確に否定していること、さらに飛躍以後の展開は、いわば純粋物質と純粋生命 (純粋精神) を切り離し、むしろ二元論の様相を呈していること (もちろん、それ以前の著書と議論の焦点は異なれど、『二源泉』がまさしく『宗教と道徳の二つの源泉 (Les deux sources de la morale et de la religion)』と名付けられたことも、この飛躍と無縁ではない)、そしてこの到達点は「神の発見」「上位の次元」とさえ呼ばれるほどに「飛躍以前」とは異なるものであること、である。

ベルクソン哲学がその展開の全体として一元論であるかないかという問題は、いまだ未解決にとどまらざるをえない。だが、少なくとも持続 (だけ) での一元論には無理があることは理解されよう。無理に持続一元論にこだわれば、それは実在そのものを、物それ自体を、単に持続と言い換えただけになってしまうであろうし、それは結局「実在は実在する」という否定できない経験の自家撞着にすぎなくなるだろう。

---

(14) ベルクソンにおける神性への接近過程およびその内容についてのさらなる論考は、拙稿 菊谷 2005b を参照いただければ幸いである。そこでは、フランス史の展開という歴史的背景も含めて論じられている。

「感想」を母の死後の逸話から、『二源泉』に触れつつ始めていることから察するに、小林秀雄は、ベルクソンの最終到達点、神秘主義を狙っていたのだろう。しかし、そこには持続一元論では届かない。まさしくその予感のため、「大体の見当はついた」ものの、結局「感想」はここで放棄されたのだ（そしてまたそのために冒頭の逸話は、単に直接経験と悟性的分析との本源的な違いを強調するための例としか解せなくなってしまった）。

確かにベルクソンの初期の著作自体に（後の著作に比べれば）持続を物質の側に引き寄せがちなきらいがあることは否定できない。本人も「数学と物理学に非常な関心を抱いていた」と言っているのだから。その意味で、小林の同様の解釈は、ベルクソンの初期の著作に忠実だとは言えるだろう。

しかし、持続も、直観も、そもそも変化を止めない振動、変化そのものであるところの運動を指しているのだから、それ自身言葉で固定できるものではない。持続も直観も純粹知覚も純粹記憶も、すべて言葉を越えた実在を言葉で捉えようとするぎりぎりの努力、固定した概念では実在を捉えられないことがわかっていても人間知性は生き延びる必要からそのようなものとして構成されており、たとえ原理的に不十分だとわかってはいても知性を用いなければ実在の何物をも知る事ができない、そのためにあえて持続と名付けた、そのような努力である。

したがって、持続＝神、神秘と簡単に言ってしまうのであればともかく、哲学以上の、知性以上の実在の側面を捉えたければ、持続一元論に陥ってはならないだろう。いわば、持続＝（絶対的な変化運動としての）物質＝生命（原理）＝精神＝神であること、いや正確にはイコールではなくそれらすべてが世界の実在の各側面であることを、信仰によってではなく——信仰は結果として現れうるだろうが——科学によって根拠付ける必要があるのだ。

この観点からこそ、ベルクソンの次の発言もよく理解できよう。

愛であり愛の対象である神、これが宇宙のいわれだ。物質は生命のために、

生命は精神のために、精神は神のために (Dieu amour et objet d'amour : tel est le pourquoi de l'univers. La matière pour la vie. La vie pour l'esprit. L'esprit pour Dieu.) (Chevalier 1959 : 155=176)<sup>(15)</sup>。

なお、この実在そのものを、神という誤解を招きやすい語で指す必要は本来ない。この点では神秘という語もまったく同じだ。しかし、それがなんであれそもそも言葉を超えたものであり、言語ではいかにしても原理的に表現できないものであることから、ベルクソンと哲学の伝統に則してさしあたりこう表現しているにすぎない。したがって、そこには、組織宗教としての意味は微塵も含まれていないことに留意されたい。それが意味するものは、世界が我々の眼前に他ではなくこのように在ることの根拠であり、この意味において世界の実在そのもののことだ。であれば、必要な連関を見出し言葉を尽くした後ならば、それを持続と呼ぶことも、物質と呼ぶことさえできなくはないだろう。この意味でなら、『二源泉』最後のあの不可思議な言葉、

神々を作る機械である宇宙の本質的機能 (la fonction essentielle de l'univers, qui est une machine à faire des dieux) (Bergson 1932 : 338=390)

の意味を捉えることができるであろうし、いずれその説明さえできることだろう。

ところで、小林が初期の著作にこだわるのに対し私が後期の著作にこだわる、この違いは何に由来するのか。それは、私がベルクソンの中に次代の社会性・社会概念を見ようとしていることから来るのだろう。

本節で見たところから察せられると思うが、持続・物質理論にこだわると、そこから社会性に達するのは容易ではない。仮に達したとしても、その社会性は

(15) 神と愛については、拙稿 菊谷 2005b を参照されたい。

機械的で物質的な、無生物の社会性となるだろう。例えばボーアは、誰が、または何が観測するのか？ 一人か複数か？ そもそも観測とは何か？ 意識とは何か？ といった次元の問いにはまったく答えられていない。それは量子力学という物質理論にとってどうしてもよい問いではもちろんなく、またその説明は社会理論の革新のために必要である<sup>(16)</sup>。

これまでのベルクソン研究（ないしベルクソンについての論考）は、小林秀雄もそうであったように、初期の著作に多く依拠したいわゆる「哲学」的な視点に集中したもの、すなわち彼の背負った歴史性や社会性を捨象し、「科学的」理論ないし純粋哲学として捉えたものであるか、または、後期の著作に依拠し、その議論の社会性や道徳性を評価しつつも多分に宗教的（カトリック的）なものであるか、どちらかであることが多かったように思われる。

しかし、仮にベルクソンの社会理論なるものを抽出し評価したいと望むのであれば、彼の歴史性・社会性を踏まえた上で初期の視点を（延長ではなく飛躍として）後期に適用し、もって——既存の諸組織宗教からは独立した——科学としてのベルクソン社会理論を、あえてこう言ってよければベルクソンの社会学を描き出さねばならないだろう。たとえそれが、彼の理論の揺れを指摘し、その時代的限界を暴露することになろうとも、その作業によってこそ、バランスの取れたベルクソンの全体像を描くことができるだろう。そして、その得られた像は、哲学のみならず、自然科学と社会科学の両方にも、新たな自己像をその中に見出す一つの鏡となるだろう。

例えば、先に見たとおり小林秀雄は、『試論』と『物質と記憶』を、「持続」をあまりにも根本と見すぎ、物質に、物理学にこだわりすぎ、ために『二源泉』への展開を狙い、冒頭で髭髯とさせつつも、描けなかった。しかし、現代物理学とベルクソンの物質理論が矛盾せず、それどころか、後者の方がより広い範囲の経験を少なくとも論理的理論としては説明しうるとするならば、ベルクソン自身が社会の中で生き、その生涯の最後に、遂に達した地点、すなわち『二源泉』末

(16) 社会理論の革新、「社会学の次段階」については、拙著 菊谷 2005a を参照されたい。

尾の神秘経験の実証的解釈、そして物質的・身体的実験へと進むうのではないか？ それをいわゆる「神秘主義的」にではなく、カトリック的にでもなく、経験に基づく科学として適切に、論理と経験に即して接近する道を示しているのではないか？ そこには社会性の新たな根拠が——それが「開いた社会」であるかどうかはともかくとしても——あるのではないか？

無論、そのような実験も研究もいまだなされていない。その意味で、現在のところ経験と論理に即して論じられるのはこのような「展望」でしかない。しかし、ベルクソンの物質理論に立脚した物理学的実験はおそらく可能であろう、いずれそのような実験は物理学・心理学・生理学等の分野で登場することだろう。そしてそれら諸科学の成果は新たな社会学・社会理論の基盤を実証することだろう。

かくして再び、「彼が、自分の仕事を、ポジティヴィズム・メタフィジックと呼んだ真意」を「今日のフィジック」が、今後は「社会性」という新たな次元で、明らかにしてくれることだろう。

### 【付記】

本年度をもって本学を定年退官される山下謙蔵教授に本稿を謹んで捧げます。

先生は、私が和歌山に赴任したその時からずっと「ともに学んで」くださいました。巷にはびこる数だけの学問業績や形ばかりで実のない狭隘な精神を軽々と乗り越え、知と生の本質を、常にご自身の生き方で示してくださった山下先生は、まさしく本物の大学人、いえ真の意味での知識人でした。

トクヴィルとデュルケームを通じて社会と科学と人間の根底を探っていた私の目が、その先の対象ベルクソンに向かうきっかけを与えてくださったのも先生でした。故あって小林秀雄のベルクソン論を読むことになった私に「ずっと以前に読んだけど、あれは本当にだめだ」と話してくださったのも先生でした。

本稿は、偉大な師を乗り越えようとする不出来な弟子の、果敢な悪あがきです。

## 参考文献

- ※引用文の訳は適宜変更した。( ) 内の年号は本稿で参照した版の発行年である。
- 饗庭孝男 1986, 『小林秀雄とその時代』, 文藝春秋社。
- Bergson, Henri 1889, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF (2001) = 2002, 合田正人・平井靖史訳 『意識に直接与えられたものについての試論』, ちくま学芸文庫。
- 1896, *Matière et mémoire*, PUF (1999) = 1995, 岡部聰夫訳 『物質と記憶』, 駿河台出版社。
- 1900, *Le rire*, PUF (2002) = 1976, 林達夫訳 『笑い』, 岩波文庫。
- 1907, *L'évolution créatrice*, PUF (2001) = 1979, 真方敬道訳 『創造的進化』, 岩波文庫。
- 1922, *Durée et Simultanéité*, PUF (1998) = 1965, 花田圭介・加藤精司訳 『持続と同時性』(ベルグソン全集第3巻), 白水社 (2001)。
- 1932, *Les deux sources de la morale et de la religion*, PUF (2000) = 1996, 平山高次訳 『道徳と宗教の二源泉』, 岩波文庫。
- 1972, *Mélanges*, PUF。
- Bohr, Niels 1990, 井上健訳 『原子理論と自然記述』, みすず書房。
- 1999, 山本義隆編訳 『ニールス・ボーア論文集 1 因果性と相補性』, 岩波文庫。
- 2000, 山本義隆編訳 『ニールス・ボーア論文集 2 量子力学の誕生』, 岩波文庫。
- Chevalier, Jacques 1959, *Entretiens avec Bergson*, Plon = 1997, 仲沢紀雄訳 『ベルクソンとの対話』(新装版), みすず書房。
- DeWitt, B. S. & Graham, N. (ed.) 1973, *The Many-Worlds Interpretation of Quantum Mechanics*, Princeton University Press.
- Everett III, Hugh 1957, “‘Relative State’ Formulation of Quantum Mechanics”, in Wheeler & Zurek 1983, pp. 315–323.
- Hallström, Per (President of the Nobel Committee of the Swedish Academy) 1928, “The Nobel Prize in Literature 1927 Presentation Speech”, <http://nobelprize.org/literature/laureates/1927/press.html>.
- 菊谷和宏 2005a, 『トクヴィルとデュルケーム——社会学的人間観と生の意味』, 東信堂。
- 2005b, 「デュルケームとベルクソン：超越への実証科学的アプローチ —— 普遍性の再建に向けて——」, 大野道邦編 『フランス社会学理論への挑戦』(日仏社会学叢書第2巻), 恒星社厚生閣。
- 小林秀雄 1958–1963, 「感想」, 『小林秀雄全集』(第五次全集) 別巻 I, 新潮社 (2002)。
- 1965, 「人間の建設」(数学者岡潔との対談), 『小林秀雄全集』(第五次全集) 第13巻, 新潮社 (2001)。
- 根田隆平 2006, 「ベルクソンと小林秀雄——信じることと苦悩すること」, 久米博他編

『ベルクソン読本』, 法政大学出版局 (この文献は本稿脱稿後に発表されたため本文中で触れることができなかったが, 「感想」を(西田幾多郎と合わせて)ベルクソン研究の側から論じている数少ない文献の最新のものである)。

森脇善明 1982, 『小林秀雄とベルクソン』, JCA 出版。

大岡昇平 1962, 「小林秀雄の世代」, 『大岡昇平全集』第17巻, 筑摩書房。

朝永振一郎 1952, 『量子力学』(I・II), みすず書房。

————— 2001, 『量子力学的世界像』(新装版)(朝永振一郎著作集第8巻), みすず書房。

Wheeler, J. A. & Zurek, W. H. (ed.) 1983, *Quantum Theory and Measurement*, Princeton University Press.

山崎行太郎 1997, 『小林秀雄とベルクソン——「感想」を読む』(増補版), 彩流社。